

中国の格差問題 (ライブラリー・コーナー)

著者	伊藤 えりか
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	207
ページ	49-49
発行年	2012-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003819

中国の格差問題

伊藤 えりか

改革・開放、市場経済化によって中国は大きな経済成長を遂げ、一人当たりの所得を大幅に増やした。中間層が出現し、巨万の富を築く富裕層が誕生した。しかし、その一方で大量の農民工（農村から都市へ流出した出稼ぎ労働者）や、貧しさ故に農地を手放す農民のように、日々の生活に困窮する貧困層を生み出している。

中国では今、様々な格差が問題になっている。『中国統計年鑑』によると、二〇一一年の一人当たりの可処分所得は都市部で二万一八〇九元であるのに対し、農村部では六九七元と大きな開きがある。経済発展には、省間格差、内陸と沿岸部の地域間格差もある。その結果、医療、教育、年金といった分野でも、所得や地域によって受けられる内容に違いが出る。中国政府が「和諧社会（調和のとれた社会）の実現」を目指す背景には、このような社会的不均衡がある。中国の格差問題を取り上げた資料を紹介したい。

三浦有史『不安定化する中国—成長の持続性を揺るがす格差の構造』（東洋経済新報社、二〇一〇年）は、所得、医療、教育、年金の各種格差と社会の不安要因をグラフや表を多用して丁寧に解説している。そして、所得格差が不平等という概念に変わりつつあることに警告を発している。世界価値観調査によると、中国は日本やインドより格差に対して寛容で競争志向が強いく、その意識の点ではアメリカに近い国であるという。さらに、今後の政治の民主化が社会の安定化の鍵となると結論付けている。

格差の実情を知るうえで、その背景を知ることが欠かせない。読売新聞中国取材団著『膨張中国—新ナシヨナリズムと歪んだ成長』（中央公論社、二〇〇六年）では、第二章を「揺らぐ社会主義」と題し、富豪の出現や住宅バブル、農民工と農村の実情、土地の再開発によるひずみなど、歪んだ経済成長にページを割いている。

阿古智子著『貧者を喰らう国—中国格差社会からの警告』（新潮社、二〇〇九年）は自身のフィールドワークによる中国の格差社会の実態をリアルにレポートしたものだ。血液ビジネスによるHIV感染者の実情、農村荒廃の背景にある戸籍の問題や農民自治の現実、租税制度や農村事業の民営化による弊害、土地をめぐる争い、農民工の実態、食糧の確保、土地制度改革と土地問題、学歴競争など、今の中国の複雑な社会問題を多角的に取り上げている。本書は「勝ち組」が支配する世界に生きる弱者に対する共感に基づいて書かれており、問題の背景が冷静に分析されている。

清水美和著『中国「新富人」支配—呑みこまれる共産党国家』（講談社、二〇〇四年）は、新聞記者だった著者の取材に基づいて、急速に増加した「新富人」と呼ばれる富裕層と逆の立場の貧困層の関係を軸に、中国の実情をまとめている。不動産バブルの実態、新支配層（新たな階層）の誕生とその社会的背景、「新富人」と逆の立場にある農民の実態、農民工と都市住民の所得

格差、農村の社会保障事情、農民工の問題で賃金の不払いや子女の教育問題の深刻化に触れている。都市部での富裕層と貧困層の格差の問題では、一〇%の富裕家庭が都市住民全資産の四五%を占め、最も低い収入の一〇%の家庭の資産は全体の一・四%に過ぎないという。しかも、最も貧しい農民が年収の十数%の税に苦しんでいるのに、多くの高額所得者の納税率はきわめて低いという。この格差こそが中国にとって最も深刻な社会問題である。しかも、「新富人」が共産党や政府の政治権力と結託し、新たな支配層と化して、さらに複雑な問題となりつつある。

園田茂人編著『現代中国の階層変動』（中央大学出版社、二〇一一年）は中国における階層研究の現状を報告した。さらに中間層の台頭が示す国家・社会関係に触れ、大都市（天津、上海、重慶）での調査結果から実証的データを分析した。新中間層の台頭が示す新たな国家・社会関係も解説している。天津、上海、重慶、広州の階層移動と階層意識も取り上げている。

園田茂人は『不平等国家中

国—自己否定した社会主義のゆくえ』（中央公論社、二〇〇八年）でさらに階層化していく中国の実情を報告している。本書は、二度にわたって行われた四都市（天津、重慶、上海、広州）調査（第一次一九九七〜九八年、第二次二〇〇五〜〇六年）や天津での四度にわたる調査、アジア・パロメーター調査（二〇〇六年）などの結果に基づいている点で注目される。調査対象地域が都市部に限定されているが、貴重な情報だ。具体的なデータを利用して、社会の階層化を紹介している。社会主義と市場経済化の逆説現象、学歴社会の復活、農民工問題、女性の階層分化、中間層の行く末などの社会を解析しており、読み応えがある。

改革・開放前、中国では「平等」は当たり前と考えられていた。それだけに、習近平の新しい体制になってからも、格差がいつそう際立つ中国社会の先行きを注視する必要がある。（いとう えりか／アジア経済研究所 図書館資料企画課）